

北海道「道の駅」を走る 成田 傑

不要不急の世代？ ひたすら外出せざるをえない人々の心配ばかりしていた。

四月九日付けで「第四十三回北海道を歩こうの中止について」という通知文書が送られてきた。五月二十四日予定のこの催し開催できるのかと疑問を持ちつつ締め切り間際の三月三十日に申し込みをしたものである。四月一日発表された例の布マスクが六月六日に届いた。前日実家に届いたマスクと比べ黄ばんでいるように思える。今更である。昨年（二〇一九年）の事を書こうと思う。（昨年、福島みゆきさんの『せせらぎ』用に書いていたものである。いつものごとく締め切り間際に書き始めたもののインフルエンザにかかり中断したものを書き続けることにする）

「北海道道の駅スタンプラリー2019」を完全制覇した。今回は全百二十四（五月一日オープンの「北オホーツクはまとんべつ」・リニューアル休館の「フォーレスト276大滝」を除く）。どこでスイッチが入ったのか十年ぶり三度目のことである。ドライブやキャンプの慰みとして一九九七年に初参加、当時は四十六駅だった。一九九九年、子どもたちの要望で六十二駅を完全制覇。以降もドライブのお供にラリー帳は欠かせないものとなった。二〇〇四年から完全制覇については二ヶ年かけても良いこととなり、二〇〇九年版百六駅を制覇する。そして今年は二〇一八年版と二〇一九年版の二冊である。ご存じのとおり北海道は広い。スタンプを押すことをメインに行動しても、オホーツク・道東で二泊、函館・渡島半島で一泊。道北は息子と二人で日帰りを強行。以降、ドライ

ブの誘いには無言で無視されることとなる。

もともと年に数回道内各地の花などを見にドライブを楽しんでいた。滝上（たきのうえ）（町）や東藻琴（ひがしもこと）（現 大空町）の芝桜、湧別（町）のチューリップ、椴法華（とどほっけ）（現 函館市恵山へえさん）の蝦夷山つつじ、桜といえは静内（現 新ひだか町）や函館市の五稜郭さらには松前（町）など。季節に合わせて小清水（こしみず）原生花園、能取湖（のとりこ）のサンゴ草、各地のバラ園や紅葉・黄葉。連続していくこともあればタイミングが悪くなかなか行けない場所もある。昨年（二〇一八年）の紅葉は台風・地震のせいか人も木々も寂しい限りであった。さて、スタンプラリーも終盤函館に一泊予定で日本海側から渡島半島一周に家内と二人でドライブに出かけた。松前の町中を過ぎ、そろそろ運転の交代を考え始めたころ、白神岬展望広場という少し広めの駐車場とトイレのあるところを見つけ駐車する。腰をさすりさすり一服。ふと見た先の碑には「伊藤整生誕の地」と彫られている。小樽生まれと思っていたとのつぶやきに「伊藤整って、何者？」と家内の問い。小説家・詩人、『若い詩人の肖像』・『日本文壇史』だったかなと口走ったが、後が出てこない。文庫本数冊は持っており読んでいたはずだが何も出てこない。かろうじて小樽の冬のイベント「雪あかりの路」の名前は伊藤整の詩のタイトルからきているはずとごまかす。函館までの道のり思い出そうとしたが思い出せずもやもやとしたままです。

五月に五稜郭へ花見にきて函館山に登ってはいるが、久しぶりに函館元町公園近辺を散策する。今度は亀井勝一郎（一九〇七〜一九六六）の

生誕碑である。何か読んでいるような気がするが黙して語らずやり過ごし、次の目的地「なとわ・えさん」へ勇んで向かう。月曜日は定休日であった。スタンプを押せず、代わりに指定の構図の写真を三枚撮り気落ちしたまま太平洋側を北上。三か所のスタンプを押し帰宅。残すは、日帰りコースの噴火湾(内浦湾)沿いのみとなる。

後日「とようら」の道の駅で完全制覇、ラリー帳を持って記念写真を一枚。帰宅後写真を見ながら家内がクスクスと。なんとラリー帳を逆さに持っているではないか。

(了)



パワハラ・セクハラ・横領疑惑……。ワンマン社長の横暴な振る舞いに辟易する社員たち。そこに、一人の男が正義を掲げ立ち上がった——。すべての働く人の心を突き刺す社会派小説

中町 礼願 著
(須田 弘・礼大ロシア語学科9期生)

2020年5月12日 幻冬社刊